

Title	巻頭言 グローバリゼーションの両義性
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.33, 2005.10 : 3-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4034
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言 グローバリゼーションの両義性

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長

阿久戸 光晴

ジョン・グレイによれば、世界市場の拡大、すなわち経済グローバリゼーションが世界各地で数多くの社会問題を引き起こしていると言き、説得力ある分析を展開している（石塚雅彦訳『グローバリズムという妄想』日本経済新聞、一九九九年）。近年先進工業諸国によつて経済問題が論じられる国際会議には、必ずといってよいほどデモ隊が押し寄せ、グローバルな市場拡大に激しく反対する抗議行動を目にすることができるといふ。こうしたグローバリゼーションに対し否定的な論者によれば、グローバリゼーションという世界観は、福祉国家の解体と財政支出の削減を企図する、市場主義者のイデオロギーにほかならないと断定される。確かに経済面におけるグローバリゼーションによつて、国家間の不平等化は促進され、発展途上国における貧困化が推進され、失業率が上昇し、多国籍企業の蹂躪によつて国内産業が壊滅的打撃を受ける可能性がある。また文化・生活面においても、グローバリゼーションは、ローカルコミュニティや国家から人々を遠心的に引き離し、グローバルな領域へ求心的に引き付ける力のはたらきであるといつてよく、ナショナルな各地域固有の文化に打撃を与える可能

性があるかもしれない。こうした可能性が先進工業諸国を含め人々に深刻な不安を与えているのは事実であろう。

しかし一方アンソニー・ギデنزは、「グローバリゼーションは単一の現象ではなく、さまざまなプロセスが重なりあつた複合的現象なのである」という（佐和隆光訳『暴走する世界』ダイヤモンド社、二〇〇一年）。ギデنزによれば、グローバリゼーションは、国際金融市場におけるある傾向の問題に短絡させてはならず、一人ひとりの身近なところにまで押し寄せ激しい勢いで進展している価値観の変動を迫る現象のことであると説く。グローバリゼーションは決して単純な現象でなく、上方統合の力と下方拡散の力の均衡の力学であり、自立分散化を促す力でもあるという。つまりローカリゼーションも呑みこみつつそれをも動かす力動が、グローバリゼーション現象の実態なのだとするのである。しかしギデنزの想定を超えて、こうしたグローバルな下方拡散の力に対するローカルな激しい抵抗も起き始めているのではないか。まずはイスラム文化圏で生活する人々の中からの反発、また東アジアや東南アジア諸国の伝統回帰という方向でアイデンティフィケーションを図ろうとする諸々の試みである（当然日本も含めて）。

一体何が起きているのであろうか？ グローバリゼーション・イコール・アメリカナイゼーションであるとして、それはアメリカ資本の世界制覇であるともみえず見解は、あまりに一面的であらう。一九七〇年代以降の通信衛星に支えられた電子通信技術の飛躍的發展は、やがて一九八〇年代には市民レベルにまで浸透し始め、その高速化とともに国境線を超え、世界至るところで情報の共有をもたらした。一九八〇年代後半へ向かつてはつきりしてきた東西陣営の経済力格差とともに、ゴルバチョフのグラスノスチ（情報公開）こそがソ連・東欧圏を崩壊させ冷戦を終わらせたとよく言われるが、事

実であろう。情報の地球大での共有化は、グローバリゼーションの本質の一つである。ここに至って、もはや国境と主権国家を前提にしたインターナショナルライゼーションの語では説明のできない現況になっている。情報グローバリゼーションに基づく問題意識の地球規模での共有化こそが、これからの人類共同体の前提となるであろう。

まとめてみたい。電子技術の進展は情報のさまざまな交流を促進し経済を活性化させ、それに伴って国境をはるかに超えて経済合理性の波が人間のローカルな生活段階の下方拡散へと押し寄せる。この経済合理性の波に乗って多国籍企業の力が現れる。このことの功罪は厳しく検討されねばならない。しかし経済グローバリゼーションという激しい奔流を完全に堰き止めることは到底できない。この奔流を正しい方向へ促す堰を設けたり、人権擁護の観点から堤防を設けたり、規範化やルール化を設定することこそが、国境を超えて必要である(サスキア・サツセン、伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代』平凡社、一九九九年、など参照)。一方、グローバリゼーションがもたらす情報の共有化という点は積極的に受け止めるべきであろう。膨大な諸情報の交流は諸文化・諸思想の淘汰を迫る。ある思想や信念が地球大で普遍性を有するか否か、存在価値の淘汰の時代がやってきている。そこで重要な鍵となるのは普遍的通用力を有する思想の明確化、共有、堅持である。

日本国憲法前文に「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚する……われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようとして、この法則に従ふ」とあるが、これはグローバルな通用力を持つ理念を堅持し学んでいこうとする宣言である。日本は二度グローバリゼーションの大波を受けて、その存在形態を根本から変えてきた。一

回目はほぼ一五〇年前の黒船との出会い、二回目はちょうど六〇年前の敗戦体験である。日本はこの二段階のグローバリゼーションの大波を受け入れ、表面的でなくその波を完全に消化して歩んでいくべきである。日本でグローバリゼーションの大波が来るときには、必ずといってよいほど、鹿鳴館的浅薄な模倣行動とそれと並存する形である「下方拡散」に対する猛烈なアレルギーが起きてきた。昨今の為政者による行動およびそれを後押しする動きが、この歴史的繰り返しでないことを祈りたい。

当研究所は、グローバリゼーションのこうした現代的両義性についてさらに追究していくこととなる。それは、当研究所がグローバリゼーションのもたらす現代的緊張に対し、対話と真理探究という面で応えていこうとするからにほかならない。